

# ドイツ・デュッセルドルフ市におけるスポーツ振興と 総合型地域スポーツクラブの現状

中 野 元

## はじめに

本稿は、2014年3月デュッセルドルフ大学の Shingo Shimada 教授の協力によって、デュッセルドルフ市スポーツ局ならびに当地の総合型地域スポーツクラブに対する調査をまとめたものである。ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都デュッセルドルフ市は、ドイツ国内でもスポーツ活動が非常に活発な地域である。ただ、近年の教育改革、人口変動そして高齢社会の進展などスポーツクラブを取り巻く環境は大きく変容しつつある。その影響はスポーツ活動あるいはクラブ運営にも及んでおり、将来に向けた新たな対応を迫られつつある。

ドイツの総合型地域スポーツについては、クリストフ・ブロイアー編著 / 黒須充監訳『ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性』で詳細な説明が行われている<sup>1)</sup>。その中で、黒須氏はドイツ全体における総合型地域スポーツクラブの歴史を踏まえ、調査報告の内容をわかりやすく概説している。また、全体を通して総合型地域スポーツクラブの有するさまざまな社会的公益性やそれが目指す目標について網羅的に解説され、これからの課題についても言及されている。

本稿では、こうしたドイツ全体における基本的な流れを前提としながら、スポーツ都市といわれるデュッセルドルフ市がスポーツ政策を具体的にどのように展開しつつあるのかをみていく。特に、2000年代に入ってから最近まで地方自治体としてどのようなスポーツ振興策を実施してきたのか、その特徴を具体的にまとめてみたい。その上で、地域に根を張り一定の規模を有するスポーツクラブや小規模なスポーツクラブがどのような活動を実施しているのかをみる。スポーツ種目数や会員数の推移、財政的規模などについて、より具体的に示す。そうすることで、デュッセルドルフの総合型地域スポーツクラブが現在どのような問題に直面しているのか、さらにその問題

---

1) クリストフ・ブロイアー編著 / 黒須充監訳『ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性』(創文企画、2010年)のベースとなっているのは、Christoph Breuer氏がドイツスポーツ科学研究所(BISp)、ドイツオリンピック連盟(DOSB)そして16州のスポーツ連盟(LSB)から委託されて実施した調査報告であり、それは“Sportentwicklungsbericht 2007/2008”としてまとめられている。

をいかなる方向性のなかで克服しつつあるのかを検証するつもりである。

現在、日本の総合型地域スポーツクラブは運営面や財政面などでさまざまな諸問題に直面しており、ときには総合型地域スポーツクラブによるスポーツ振興政策に対して問題提起が行われたりしている。例えば、小林勉氏は、日本のこれまでの事情を整理しながら、総合型地域スポーツクラブによるスポーツ振興政策を地域活性化と関連させて普及させることに疑問を呈している。また、実際に起こっている八王子市などでの混迷状況を指摘しながら、日本でのスポーツ振興策については相当な問題と課題が根強く横たわっていることを強調する<sup>2)</sup>。こうした問題に対して、本稿が、日本のスポーツ振興政策の新たな展開に向けて、わずかでも参考になればと考えている。

今回訪問したスポーツ関連施設・クラブは、次の通りである。まず、スポーツ政策の事情に関してはデュッセルドルフ市のスポーツ局の Knut Diehlmann 氏から資料とともにさまざまな内容を教えていただいた。また、実際のクラブ (Verein) 運営などに関しては、デュッセルドルフ市のなかで比較的大きなスポーツクラブとして DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V. の Ute Groth 会長と Post-Sportverein Düsseldorf e.V. 1925 の Hermann Mölck 会長から、さらに小規模なスポーツクラブとして TTC Union Düsseldorf 1947 e.V. の Torsten Budde コーチから、最近の諸事情や今後の課題などについて詳しく話を聞くことができた。これらの方々には、多くの資料を快く提供いただくとともに、長時間のヒアリングにも応じていただいた。心より感謝申し上げます。

## 1. デュッセルドルフ市スポーツ局の政策と課題

デュッセルドルフ市はベルギーと国境を接するドイツ西部のライン川沿いにある都市で、現在ノルトライン・ヴェストファーレン州の中心となっている。中世都市として栄え大聖堂がそびえ立つケルン市の北に位置しており、面積は 217.22 km<sup>2</sup> の広さを有している。歴史的には、ライン川支流のデュッセル川のほとりで栄え名付けられたといわれており、詩人ハインリッヒ・ハイネが生まれた町としても知られている。

---

2) 小林勉氏は、自著『地域活性化のポリティクス』(中央大学出版部、2013年)の中で、日本における総合型スポーツクラブづくりの取り組み、それを中心としたスポーツ振興政策について、その問題点を理論的な系譜とともに具体的な実態を示すことで指摘している。日本におけるスポーツ振興を展開するに当たって本当に取り組むべき課題は何か、これまで十分に検討されてこなかった「誰もが参加できる」スポーツの環境整備を進めるために、この問題提起をよりリアルに展開している。実は、こうしたリアルな緊張感は、デュッセルドルフの政策担当者や各クラブの会長などと話していても感じたものだった。歴史的に培われたものであるだけに、時代の変化に対応すべくいかに確固とした方針を持ってクラブを発展させるべきか、真剣であればあるほど緊張感があり、試行錯誤しながら取り組んでいるように感じられた。いろんな不安要素がある中で、ドイツはドイツで独自に将来のさらなる発展を目指してチャレンジしている、こうした使命感のようなものをヒシヒシと感じることができた。

歴史文化の漂う風光明媚な地域として親しまれているとともに、日系企業の立地が多い商業都市としても有名である。デュッセルドルフ市には、2012年現在約60万人の住民が住んでいる。この州全体の人口が増えていないなかで、この都市だけは増加傾向にあるといわれる。

### (1) デュッセルドルフ市のスポーツ振興政策の展開

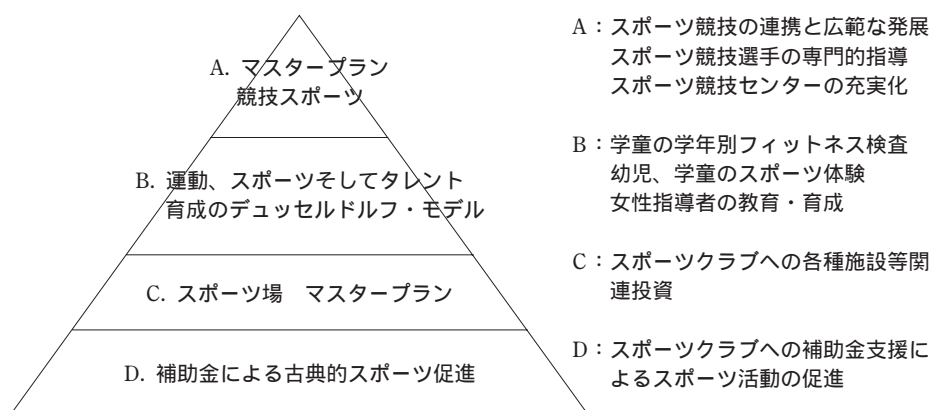
このデュッセルドルフ市のスポーツ政策について、スポーツ局のDiehlmann氏の説明をもとに“Entwicklung der Sportförderung in der Landeshauptstadt Düsseldorf” (2010年)の資料にしたがってまとめてみる。

スポーツ振興策は、4つの分野・段階に分けて展開されている。まず第一は、補助金認可による古典的(klassisch)スポーツの振興である。第二はスポーツ場マスタープランであり、第三は運動やスポーツそしてタレントを育成するデュッセルドルフ・モデルである。最後に第四がスポーツ競技マスタープランである。スポーツ振興策は、補助金による幅広いスポーツ振興からスポーツクラブ運営への支援、スポーツ能力の育成事業からトップのスポーツ競技の支援へと段階的体系的に組み立てられている(図1参照)。

#### ① 補助金認可による古典的スポーツの振興

まずスポーツクラブへの補助金については、デュッセルドルフ市民の体操、スポーツ活動へのクラブ補助の基本方針が定められた上で、その権限をデュッセルドルフ協議会のスポーツ委員会に置いている。そして、補助金は大きく投資的補助金(Investive Zuschüsse)と消費的補助金(Konsumtive Zuschüsse)に分けられる。まず

図1 スポーツ振興の4段階と基本内容



出所. “Entwicklung der Sportförderung in der Landeshauptstadt Düsseldorf” より筆者作成

注. D.の「古典的」スポーツは“klassisch”を直訳したもので、「これまでの」とか「旧来的の」という意味であろう。

前者は、建築費やスポーツ用具などの標準的補助金と、クラブ間の連携や特別のエネルギー節約措置などの特別補助金とに分けられる。後者(消費的補助金)では、市と市スポーツ連盟との間に管理協定が結ばれており、それに基づいて補助金は配分される。この管理協定の目的は、幼児や青年スポーツの推進、次代の青年スポーツやトップクラスの特別なスポーツ推進、魅力的で多種多様なスポーツの提供(みんなのスポーツ)、スポーツ場マスタープランを通じてのスポーツ場の近代化・新築に向けられる。これとは別に、本来の補助的性格の消費的補助金として、2009年では表1のような補助が実施されている。

表1 消費的補助金

補助の内容	金額(ユーロ)
特別なスポーツ開催補助	111,000
選手権参加のための交通費補助	78,000
青年スポーツ補助	598,000
維持費補助	742,000
市所有ではない体育施設使用の賃貸料補助	70,000
道路清掃料金と開発措置の引き受け補助	71,000

出所: “Entwicklung der Sportförderung in der Landeshauptstadt Düsseldorf”  
参考: 2010年9月は1ユーロ=約110円, 2014年11月は1ユーロ=約145円。

## ② スポーツ場マスタープラン

次に、スポーツ場マスタープランに関する振興策では、2001年から10年間の投資プログラムで1億4千万ユーロがスポーツクラブの施設関係に補助されている。この額は、ISS(アイスホッケー屋内リンク)やESPRI(室内サッカー場)を除いた金額といわれる。既存のスポーツ施設の建て直しや改装、建設によって、スポーツ・インフラの整備が着々と進められている。

デュッセルドルフ市にはスポーツクラブが現在約350あり、会員は約13万人いる。ドイツのなかでもスポーツが非常に盛んな都市である。ただ、この会員数は複数種目にまたがる数であり、延べ人数を指しているのではあるが。これは、2001年にスポーツ計画を打ち出し、クラブをより充実化させるための目的を明瞭にした成果でもある。

そこで、スポーツクラブの規模をみると、それは約40人程度の小さなクラブからFortnaのように2万人以上の会員がいる大きなクラブまで広範囲に及んでいる。なかには、4年前まで約40人しかいなかったのに、現在では2万人にまで会員を増やしたクラブがある。保険組合を基礎にしたリハビリなどのサービスを提供している健康づくりクラブである。全体としてみれば、スポーツクラブの会員数は増えている。若者では特に女性のダンス系スポーツが、高齢者ではリハビリや交流会などの健康重視系のクラブ会員が増えている。

### ③ 運動やスポーツそしてタレントを育成するデュッセルドルフ・モデル

これは、2003年から始まった新しい試みである。子どもや青少年ができるだけ早く運動に興味を持ち虜になることで、運動、スポーツ能力を促進させようというデュッセルドルフ・モデルである。具体的には、デュッセルドルフの学童たちを学年度別にフィットネス検査を行い、運動とスポーツを楽しむとともにその能力によってはさらなる育成と競技種目との出会いを図ろうという取り組みである。2003年から小学校2年次クラスの学童たちを対象にチェックを行い、2005年からは5年次の再チェックを、2010年からは10年次クラスの学童の再チェックを実施してきた。2012年までに、総計7万人以上の学童にフィットネス検査を実施した。そして、このモデルを推進するために、付随的方策と継続的方策が推進されている。

### ④ スポーツ競技マスタープラン

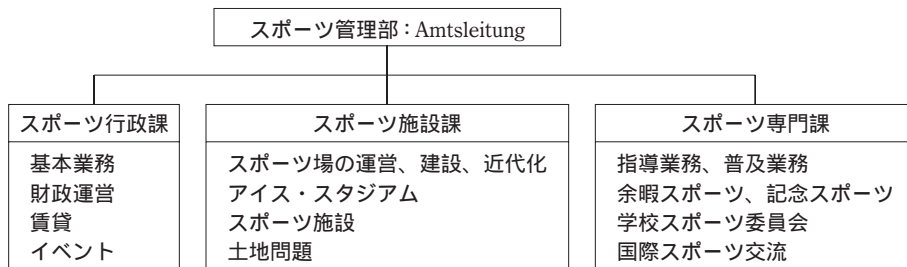
2006年から、スポーツ委員会は、デュッセルドルフにおけるスポーツ競技の全体的連携をはかり広範な展開を遂げるという任務を明確にした。ここでは、既存の活動を明示し共通の規準やガイドラインを作成して目的を達成すること、スポーツ競技のネットワークを構築することが盛り込まれた。それによって、地域のスポーツ・システムの連携を促進するとともに、タレントの発掘、育成、スポーツ競技能力の向上を目指した。

そのための方策として、スポーツ競技選手による専門的指導、クラブの広がりや連携による波及効果、デュッセルドルフ競技センターの財政的推進、地域のスポーツ競技センターの建設、広範囲のスポーツを網羅するインターネットの設立が提起された。

## (2) デュッセルドルフ市スポーツ局とその役割

市スポーツ局の“Das Sportamt”によれば、市スポーツ局はこれまでスポーツ振興のための魅力的な事業・促進策をスポーツに熱心な多くの市民に提供し続けてきた。その事業分野は、スポーツ行政課 (Verwaltungsabteilung) ・スポーツ施設課 (Sporteinrichtungen) ・スポーツ専門課 (Sportfachabteilung) といった3つの領域から構成され

図2 スポーツ局組織構造



出所．“Das Sportamt”より筆者作成

ている(図2)。

### ① スポーツ行政課 (Verwaltungsabteilung)

まずスポーツ行政課は、賃貸しやイベントそして財政運営に関する支援策を実施している。市スポーツ局は、市スポーツ連盟やデュッセルドルフ・スポーツクラブと協力しながら、16の地区スポーツ施設を中心に毎年総額約600万ユーロを費やしてスポーツ活動を推進している。具体的には、行政的手続きや施設利用の短期的そして長期的契約についての、さらにはクラブの財政的・金融的活動などに関する相談・支援を行っている。

### ② スポーツ施設課 (Sporteinrichtungen)

スポーツ施設課は、スポーツクラブが管理している130以上のスポーツ施設のほかに15の地区のスポーツ施設があり、その管理・運用を行っている。このような市の施設の必要な改修や維持策とならんで、スポーツ・マスタープランの実現を進めている。ここでは、スポーツクラブと協力して将来計画を策定し、建物や施設の建て直し、近代化そして補修を推進するとともに、建て直しの際にはスポーツ運営再開までの建設方策をも調整している。さらに、スポーツクラブの樹木の手入れや門、柵の修理・改築、通路の整備や危険箇所の除去なども支援する。こうした作業のために、各クラブに年総額25万ユーロの資金援助が行われている。

### ③ スポーツ専門課 (Sportfachabteilung)

最後に、スポーツ専門課は指導や普及そしてレクリエーションに関する業務を実施している。特に注目されるのは、学校スポーツに関わってデュッセルドルフ・モデルを実行する業務である。このモデルは、デュッセルドルフのすべての基礎学校(4年制)とその継続の学校で行われる運動診断テスト“Check!とReCheck!”で実施される。この運動診断テスト“Check!とReCheck!”は、第2学年と第5学年の生徒による速さ、調整(Koordination)、力、持久力そして柔軟性を把握するための運動診断の複合テストである。問題練習は、表2のように8つの分野がある。この他に、体重、身長そしてボティーマス指数(肥満度)が検査される。

こうしたデュッセルドルフ・モデルを推進するために、それに関連して様々なプロジェクトが実施されている。例えば、スポーツ能力テスト“Check!-Kinder”によるタレント発掘事業である。これは子どもたちの運動能力がどのスポーツ種目にふさわしいかという能力適正を早期に見いだすための専門的知識に基づく事業である。また

表2 運動診断テスト

10 m 短距離走	ボール・脚・壁	障害物競走	メジシンボール突き当て
立ち幅跳び	上体起こし	胴体下方屈伸	6分走

出所: “CHECK! Bewegungs-, Sport-, und Talentförderung”, “Re-CHECK!”

“Kids in Action” 事業では、多くのスポーツクラブと連携して子どもやその家族が無料で体験できる魅力的なスポーツ情報見本市が行われており、子どもたちは運動やスポーツ活動に素朴に接し楽しさを味わっている。さらに、子どもたちを対象としたプログラムとして“Kita-Schwimmen” 事業も実施されている。これは、水泳協会と連携した就学前段階での運動教育支援活動である。子どもたちが水に親しみ、水を克服し、水を怖がらないようにし、水泳を習得する、こうした水中での運動活動の促進を目的としている。

そして、毎年夏休みの最終週になると、“Olympic Adventure Camp” 事業がある。これは、6歳から21歳までの子どもから青年までが50を超える多くのスポーツ事業に無料でチャレンジ（テスト）できる取り組みである。市スポーツ局、青年局そして市スポーツ連盟の共同イベントとして実施されている。1万人以上の子どもたちが、この事業の見学に訪れたという。

さらに競技レベルを向上させるために、いくつかの整備を進めている。一つは、NRW（ノルトライン・ヴェストファーレン）スポーツ学校である Lessing-Gymnasium の運営であり、また青年やトップクラスの選手のスポーツ促進やさらにその上の発展段階としてのプロ・スポーツの創設などである。州都デュッセルドルフにおける競技スポーツをさらに普及・発展させるために、競技スポーツの研究チーム（Arbeitskreis）が設立され、そこでは最適化、能率向上、有効なシナジー効果をスローガンに国内的、国際的な競技レベルの向上が目指されている。

### （3）デュッセルドルフのスポーツ都市としての発展状況

#### ① 全体の会員数の動向

デュッセルドルフのスポーツクラブに関しては、市スポーツ局の“Mitgliederzahlen und Sportarten in den Düsseldorfer Sportvereinen” に基づいて、以下説明したい。まず、デュッセルドルフのスポーツクラブにおける会員数の動向を示したのが、表3である。この12年間に、全体で約2万人（男女とも約1万人の増）増えている。増加率で見れば、2000年の女性会員数が少なかった分、女性の伸び率が高くなってい

表3 デュッセルドルフのスポーツクラブ会員数の動向

(人)

	2000年	2003年	2006年	2009年	2012年
男性	69,045 (100)	69,004 (99.9)	69,730 (101.0)	71,948 (104.2)	79,226 (114.7)
女性	41,652 (100)	41,584 (99.8)	41,897 (100.8)	44,488 (106.8)	52,015 (124.9)
合計	110,697 (100)	110,588 (99.9)	111,627 (100.8)	116,436 (105.2)	131,241 (118.6)

出所：“Mitgliederzahlen und Sportarten in den Düsseldorfer Sportvereinen” より作成

注。（ ）内は2000年を100としたときの指数を表している。

る。また、デュッセルドルフ市の人口に占めるスポーツクラブ会員数の割合（組織率）は、2000年の19.5%から2012年の22.2%へと約3%ポイント伸びたといわれる。

### ② 年齢別会員数の動向

これを年齢別にみたのが、表4である。これをみると、児童から青年層（0～18歳）と60歳超の高齢者層がこの間着実に増加してきているのがわかる。2012年は対2000年比でみると、前者で7,557人、後者で約1万人増えている。この結果、この二つの層が全体に占める割合は、2000年の42.1%から12年は48.8%へと高まっている。

表4 年齢別会員数の動向

(人, %)

区分	2000年	2003年	2006年	2009年	2012年
60超～	15,258	17,978 (17.8)	20,385 (13.4)	20,820 (2.1)	25,203 (21.1)
41～60歳	30,547	29,095 (-4.8)	28,953 (-0.5)	32,311 (11.6)	39,199 (21.3)
19～40歳	33,574	30,814 (-8.2)	27,792 (-9.8)	26,863 (-3.3)	27,964 (4.1)
0～18歳	31,318	32,701 (4.4)	34,497 (5.5)	36,442 (5.6)	38,875 (6.7)

出所：表3と同じ

注：( )内は対期比の増減率を表している。

### ③ トップ10種目の会員数の動向

次に、2012年での会員数の多い上位10種目を2000年との対比でみたのが、表5である。サッカーは7,628人増えて25,628人に達し、最も多い会員数となっている。またバレーボールも1,241人増えて3,952人に達し、上位種目として第7位から第4位へと上げている。また、テニス、体操はそれぞれ10%、15%の減少をみせながらも、一定の会員数規模を保っている。ただ、これ以外にこの12年間で増加している種目として、ホッケー、ゴルフ、卓球、陸上、水泳があるが、なかでもホッケーとゴルフは996人、728人も増加しているのが注目される。

### ④ 児童・青年層（0～18歳層）における会員数増加の特徴

2012年で児童・青年層が1,000人を超える会員数を達成しているスポーツ種目は、表6の通りである。サッカーは増加数が4,080人と大きく、54%もの増加率を示し人気となっている。また、テニスやホッケーでも669人、558人と増加している。全体としては、競技試合向きのスポーツ種目で会員が増えている。特に、Fortnaサッカー・クラブが一部リーグに昇格するなど過去数年間に一定の成果を達成したスポーツ種目で、平均以上に多い会員の増加がみられた。さらに、運動やスポーツ能力を促進するためのデュッセルドルフ・モデル事業やそれに関連するタレント育成企画、各種のスポーツ活動参加プログラムなどで取り込まれるスポーツ種目にも、増える傾向がある。



表5 トップ10のスポーツ種目別会員数とその動向

(人)

スポーツ種目	2012年会員数	2000年会員数	増減数	増減率
1. サッカー	25,628	18,000	7,628	42%
2. テニス	14,392	16,036	-1,644	-10%
3. 体操	13,203	15,586	-2,386	-15%
4. バレーボール	3,952	2,711	1,241	46%
5. ゴルフ	3,832	3,104	728	23%
6. ハンドボール	3,623	3,861	-238	-6%
7. 陸上	3,425	3,244	181	6%
8. 卓球	2,574	2,355	219	9%
9. ホッケー	2,506	1,510	996	66%
10. 水泳	2,479	2,405	74	3%

出所：表3と同じ

表6 1,000人以上の会員がいるスポーツ種目における会員数とその動向

(人)

スポーツ種目	2012年会員数	2000年比増減数	2000年比増加率
サッカー	11,656	4,080	54%
体操	5,717	242	4%
テニス	3,615	669	23%
陸上	1,850	301	19%
水泳	1,521	348	30%
ホッケー	1,153	558	94%
全種目	38,875	7,557	24%

出所：表3と同じ

#### (4) デュッセルドルフのスポーツ振興策と施設整備

ここでは、これまで言及してきた以外に、スポーツ・マスタープランに基づいてどのような施設が市スポーツ局によって整備されているのかについて、“Sportstadt Düsseldorf-Historie, Sportveranstaltungen, Vereinsport, Sportstätten-”によって概観してみる。

デュッセルドルフのスポーツ振興策として、まずスポーツ場のマスタープラン(2001年～12年までの期間)でみると、ホールや人工芝などの新築、改築で103の措置が実施されてきた。総額1億2,600万ユーロをかけて整備している。具体的には、室内陸上競技場の建て直しで1,000万ユーロ、ドイツ卓球センターに580万ユーロ、2つの室内スケート場に400万ユーロ、スポーツホールに700万ユーロなどである。

競技スポーツのマスタープランについては、競技スポーツのプロ化、クラブ間やス

スポーツ間の連携推進，デュッセルドルフ・スポーツセンターの財政的推進，NRW-競技スポーツセンター，インターネット網の整備そしてNRW スポーツ学校等で年50万8,000ユーロが予算化されている。さらに，運動，スポーツそして能力推進のデュッセルドルフ・モデルやそれに関連する各種教育，企画，イベント事業などで，21万3,000ユーロが予算化されている。

こうしたマスタープランの成果として，デュッセルドルフのスポーツ場は，2013年2月時点で150以上のスポーツ施設，200以上の室内スポーツ施設，デュッセルドルフ市によって運営されている16の地区スポーツ施設で整備されている。また，市スポーツ局が管理しているスポーツ施設面積は約106万 $m^2$ もの規模に達している。このうち「芝」は約35万 $m^2$ で33%，「人工芝」は28万 $m^2$ で27%と，近年「人工芝」の面積が増え一定規模を有している。大規模競技場数で見れば，「芝」が31施設（市スポーツ局管理が10，スポーツクラブ管理が21），「人工芝」が37施設（9，28），「土」のグラウンドが14施設（1，13）となっており，大規模競技場の「人工芝」が多いのがわかる。

デュッセルドルフの室内スポーツ場と室内スポーツ場面積は，表7の通りである。

表7 室内スポーツ場とその面積

室内スポーツ場		主な室内スポーツ場(面積)
1 多目的ホール	33の体育ホールと体育場	多目的ホール(1,621 $m^2$ )
1 室内陸上競技場	3つの柔道場	多目的ホール(1,617 $m^2$ )
1 多面的スポーツホール	12のアスレチック場	3面ホール(21,599.73 $m^2$ )
20の3面スポーツホール	3つの卓球場	2面ホール(6,354.52 $m^2$ )
10の2面スポーツホール	* 室内スポーツ場面積は	1面ホール(35,398.22 $m^2$ )
117の1面のスポーツホール	7万9,000 $m^2$ 以上に及び	体育ホール(5,712.29 $m^2$ )

出所. “Sortstadt Düsseldorf-Historie, Sportveranstaltungen, Vereinsport, Sportstätten-”

#### (5) デュッセルドルフ市民アンケートによるスポーツ活動と意識調査

市スポーツ局のスポーツ委員会は，2010年3月の会議で，これまでのゴールド・プランの価値基準はこれからスポーツ基盤の整備をますます発展させる上で必ずしも十分ではなくなっているという認識に至った。これからの男性・女性のスポーツ活動にふさわしいあり方を構築するために，人口の約22%が所属しているスポーツクラブとは別に，住民を対象としたアンケートを実施することを決定した。これによって，全年齢別グループの住民がいかなるスポーツを，どのように，何によって経験しているのか，どの程度の満足度を感じているのか，いかなる要望を持っているのか，という情報を得，これからのスポーツ活性化ならびに将来にふさわしいスポーツクラブの発展に結びつけることを目指している。この住民アンケートは，2010年6月と10月に実施され，男女約8,000人（回収率31%）が質問に回答した。“Sport und Bewegung

in Düsseldorf-Ergebnisse der Bevölkerungsumfrage-”に基づいて、以下主な特徴をみてみたい。

① ドイツで最も盛んなスポーツ活動

まず、デュッセルドルフはドイツで最もスポーツ活動が盛んな大都市であることがわかる。過去 10 年間に行われた同じようなアンケート結果を比較したのが、表 8（「スポーツないし運動をしている」と回答した割合）である。デュッセルドルフは 85.3%が「している」と回答している。次いで、ブレーメン（81.2%）、ハンブルク（80.3%）、ハノーファー（78.8%）と北部地域の大都市が続いている。

では、123 もの様々なスポーツ種目のうち、どのようなスポーツ種目をしているのか。アンケートの回答では、1 人平均 2.28 のスポーツ種目を実施していると答えている。また最も多い種目では、自転車サイクルが 42.9%、次いでジョギング・ランニングが 32.2%、水泳 30.2%、フィットネストレーニング 18.8%、散歩 16.6%、ノルディック・ウォーキング 10.0%と続いている。注目される競技種目では、サッカー 8.5%、テニス 4.8%、体操 4.8%などとなっている。

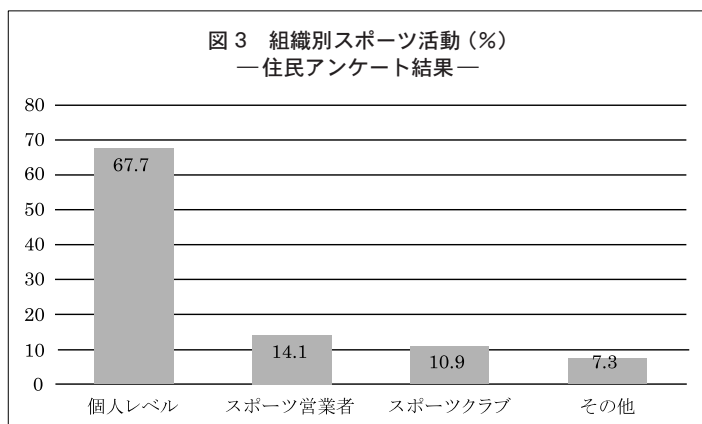
② スポーツ活動を行う組織

住民はスポーツ活動をどのような組織で行っているのか？この項目では、67.7%（約 3 分の 2）の住民が、個人的ないしは個人グループ（個人的組織）でスポーツを楽しんでいる。比較的多くの人が行っている自転車サイクリング、ジョギング、水泳は、確かに個人的にも十分楽しめるスポーツといえる。次いで、スポーツ営業者のもとでのスポーツ活動が 14.1%、スポーツクラブが 10.9%、その他が 7.3%となっている（図 3 参照）。このアンケートでは、スポーツクラブのライバルとして設立され、近年増えつつあるスポーツ営業者の割合が、スポーツクラブより高くなっている。では、

表 8 スポーツ活動の都市別アンケート

都市名	統計年度	人口(人)	回答割合
Dusseldorf	2010	586,217	85.3%
Bremen	2002	540,000	81.2%
Hamburg	2009	1,774,224	80.3%
Hannover	2008	520,966	78.8%
Munchen	2008	1,330,440	75.0%
Berlin	2006	3,442,675	72.0%
Stuttgart	2007	594,000	71.0%
Frankfurt / Main	2009	671,927	66.4%
Nurnberg	2008	503,673	62.1%
Koln	2003	1,020,000	58.8%

出所. “Sport und Bewegung in Düsseldorf-Ergebnisse der Bevölkerungsumfrage-” より作成



出所. “Sport und Bewegung in Düsseldorf-Ergebnisse der Bevölkerungsumfrage-” より筆者作成

こういったスポーツで多いのか? “Sortstadt Düsseldorf-Historie, Sportveranstaltungen, Vereinsport, Sportstätten-” の資料によれば, 「ヨガ」, 「アスレチック・スポーツ」, 「フィットネス/体操」といった分野で特に高い割合が示されている。競技スポーツというよりは健康維持のための運動を, 営業的組織が担いつつあるともみられる。

#### ③ スポーツ場(施設)への満足度は高い

デュッセルドルフのスポーツ場(施設)に対する満足度では, 夏期利用施設については, 「良い」・「非常に良い」が73.4%, 「可」・「不可」は7.8%にすぎない。また, 冬期利用施設については, 前者が68.6%, 後者が10.4%となっており, 冬期利用施設への不満が若干増えている。冬期に利用できる室内スポーツ場(施設)の整備・充実への期待が比較的大きいようだ。

#### ④ 健康志向が高まるスポーツ種目

これからのスポーツ活動への住民の興味に, どのような特徴があるのか? アンケートによれば, 58.9%が現在携わっているスポーツ種目に満足しており, 新しいスポーツ種目に挑もうとする人は比較的少ない。ただ, 28.2%は, 「お試しコース」で新しいスポーツをのぞいてみようと考えている。特に, 11.7%は, 今後新しいスポーツ種目をしてみよう計画している。「お試しコース」のスポーツ種目では, 「ヨガ」, 「ダンス」, 「ゴルフ」, 「登山」が比較的多い。これから計画している「新しいスポーツ種目」では, 「水泳」, 「ヨガ」, 「ダンス」が比較的多い。「ヨガ」と「ダンス」は, 女性を中心に人気が高まっているようである。

#### ⑤ スポーツクラブの評価と期待

最後に, スポーツクラブに対する評価について, クラブ会員と非クラブ会員の双方からアンケートしている。クラブ会員は, 自分が所属するスポーツクラブを「興味があり」「人間的で」「魅力的」と肯定的評価を行っている。ただ, 「フレキシブル」

「割安」「現代的」という項目では、若干賛同が下がる。他方、非クラブ会員はすべての項目でクラブ会員のそれよりも若干低い評価をしている。

将来を展望した場合に、スポーツクラブ活動で重要なことは何か？ 会員・非会員を問わず全員一致して、「児童や青年活動の充実」を「非常に重要」としている。それに次ぐ「非常に重要」なものとして、「健康志向のスポーツ提供」、「クラブの情報提供の改善」が続いている。「より強い競技スポーツ」については、会員・非会員とも「五分五分の重要性」という評価になっている。

デュッセルドルフが高い生活の質を有する近代都市として今後さらに発展を遂げていくために、これらのアンケート結果は多様なスポーツクラブの活動に生かされていくことが期待されている。

#### (6) 今後の発展に向けた方向性と課題

方向性と課題については、大きく4つの点からみることができる。まず第一は、安定したクラブ運営に向けた取り組みの必要性である。クラブの運営は、基本的に毎年開かれる総会で会員の総意によって決められる。そして、クラブの法人の監査は、1年に1回クラブ自体で行われたものを税務署に報告しなければならない。こうしたクラブ運営では、近年マネージャー（ファイナンスの管理を含めた）の果たす役割が大切になってきている。

これまで全てのクラブはそれぞれ固有の特徴を持ち、その良さを発揮してきた。というも、それぞれのクラブでは会員数も異なり会費もさまざまで、その活動内容も違っているからである。しかし、時代の流れとともに、スポーツの広がりや変遷が進んでいるとき、その財政的基盤の強化は避けることができない。Fortnaのようにプロスポーツがありスポンサーもついてメディアにも取り上げられる大きなスポーツクラブはいいが、他の多くの小さなクラブにとってはどれくらいの企業の支援体制を持てるか、未知数の部分が多い。実際に支援している企業でも、トーナメント出場に絡んでの一時的な契約を結ぶだけの場合が多い。クラブ運営を強化充実させるためには、一方で会員獲得と会費収入の安定化を図り経営能力を高める必要がある。他方では、近隣地域に立地している企業などによる資金的な支援体制の強化が、これからさらに求められているようだ。

第二は、コーチなどクラブにおける指導体制の整備とそれを保障するクラブ運営の整備である。ドイツ・オリンピック協会は、スポーツ競技別に資格制度を確立している。基本的にコーチになるためには、18才以上で子どもを指導できる技術取得が認められなければならない。ただ、問題はスポーツクラブによっては必ずしも正式の指導者・コーチを十分に配置できていないことにある。例えば、Vitalis やテニス、ゴルフなどは専門の技術コーチがいるが、他のスポーツでは結構ボランティアに依存して

いる場合が多いという。基本的に、資格を持っているコーチのもとでトレーニングをすることでさまざまなスポーツ能力を高めることができる。デュッセルドルフは他の都市と比べて支払い能力のある市民が多いという事情もあり、会費を今より高くすることで指導体制を整備し、市民スポーツの広がりや運動能力の向上を通じて市民生活の質を高めることが大切といわれる。

第三は、若者や高齢者のスポーツ交流をより促進させることである。先の表にもあったように、現在スポーツクラブには若者と高齢者が増えている。その特徴は、若者のうち特に女性でダンスやヨガなどを楽しむ人が増えてきたことである。また、ドイツの教育制度の新たな動向として、日本のように学校スポーツを盛んにしようとする傾向がある。郊外にあり施設拡充に余裕のある学校では、グラウンド、体育館などの整備を進めている。この意味では、青年層のスポーツクラブへの参加の仕方に影響が出る可能性がある。他方、高齢者では競技種目というよりも、例えばハピリとか交流会など健康志向の運動、レジャーに注目が集まっている。総じて、現在ではこれまでとは違った新しいスポーツや運動プログラムの設計・整備を検討する時期に入っているといえよう。

第四は、各種スポーツクラブあるいは商業的スポーツ施設などとの連携をさらに促進することである。住民の新しいニーズに対応するために、既存のクラブのなかに新しい施設やプログラムを次々に設置することは必ずしも得策ではない。むしろ、民間のフィットネス・センターと協定を結び連携強化を図ることで、地域のスポーツクラブがその弱点を克服し、その良さを発揮することの方が有益となっている。

スポーツクラブの新たな展開がさらなる地域社会の活性化に大きな影響を与えることができる。この方向性のなかで、市スポーツ局のスポーツ振興策はその役割を実現しようとしている。

## 2. 総合型スポーツクラブの目標

### (1) フェライン基準規約 “Mustersatzung für Vereine”

「ドイツにおけるスポーツクラブ (Sportverein) は、管轄区の区裁判所に設けられた社団登記簿に登録することによって登記社団法人 (e.V.) となり、そのことによって権利能力 (民法第 21 条) を獲得する。ドイツオリンピック連盟 (DOSB) 傘下のスポーツクラブはほとんどすべてが登記社団法人である。」<sup>3)</sup>

この Verein (クラブ) は、その規準規約 (Mustersatzung für Vereine) によってその

---

3) クリストフ・プロイアー編著 / 黒須充監訳 『ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性』 (創文企画, 2010 年), 172 ページ参照。

活動内容を規定されている。まず、Vereinが「納税上の特典を得る」意義は、それが公共の、慈善のあるいは教会の目的を持って活動していることにある。この目的の内容は、例えば、科学や研究、青少年福祉事業と高齢者福祉事業、教育と文化、自然保護、環境保護の促進、公的保険制度の推進、スポーツや援助を必要としている人への扶助の促進をいう。そして、この規約の目的は、例えば、科学的行事や研究計画の実施、研究委託の配分、学校や教育相談所の整備、収集美術品の保護、良歌や聖歌合唱の保護、自然保護地区の設置、幼稚園や養護施設、青少年センターの整備、老人ホームや保養所の整備、薬物乱用、騒動の抑制、スポーツ練習や成績の向上によって実現される。

この規約に基づいて、Vereinには次のような内容が定められている。法人は、もっぱら自らの経営利益を追求するのではなく、無私の活動を行うことにある。法人の資金は規約に基づく目的に沿ってのみ使用され、会員は法人の資金から手当てを受け取らない。誰も、法人の目的とは異なる支出や過度に高い報酬によって便宜が図られることがあってはならない、などである。スポーツクラブは、この規約に基づいて運営されている。

## (2) 予測に基づくスポーツクラブの目標設定

～DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V.の“Konzept Zielplanung”掲載の報告書より～

2007年5月、ドイツ・オリンピック連盟の「人口変動」プロジェクト・グループは、ドイツで現在起こっている人口変動によってこれからのスポーツ活動や組織にさまざまな影響をもたらされるとして、次のような報告を行った。

まず、人口減少、高齢社会の到来、地域社会や地場産業の苦戦が進む中で、国や地方自治体の役割は明らかに変化する。長期の使用期間をむかえた施設の建て替えや改築などへの費用負担が拡大し、それが新たな施設建設への投資を抑制する。このことによって、市民個々人の自己責任がますます大きくなってくると予想している。

そうした社会に対応するために、スポーツクラブには、まず第一に高齢者が健康となり健康であり続けるために物的、精神的な健康増進活動が求められ、社会生活におけるコミュニケーションと相互扶助の推進といった面で、これまでに倍する役割が期待されることになる。第二に、児童や青少年から高齢者までの生涯運動はそれぞれ個々人の人生にとって有益であるとともに、スポーツクラブにとってもこれまで以上にやりがいのあるテーマとなる。第三に、より柔軟な取り組みを広げることによって広範な住民にとって魅力的で質の高いスポーツの提供者となる。具体的には、一方でこれまでのように確立された種目を定時間帯でスポーツ活動を推進しながら、他方では住民の要望している時間帯設定に添うようにするとともにフィットネスや各種の健康スポーツなど新しい種目への体験と出会いを提供するということである。こうして、ス

スポーツクラブに必ずしも所属していなくても、講習会や一時的な企画会合によってスポーツクラブへの橋渡しの事業を展開することができる。地域社会の中で住民が望むスポーツがいつその拡がりを持つことで、あらゆる世代の運動場所としてのスポーツクラブは新たな発展を遂げることができるとする。

こうして、スポーツクラブは住民の相互扶助を増進し、青少年分野では重要な教育的役割を演じることで、社会的な使命を果たし社会的評価を得ることになる。将来、スポーツクラブは、ドイツの移民を含めた広範な住民にとっての新たな故郷となりうるとする。

### (3) ケーススタディ、DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V. の目標設定の事例

DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V. による 2008 年の目標計画では、今後の予測を 3 点から行っている。第一は、児童の学校での授業増加によってスポーツクラブでの運動時間はさらに大きく減っていくことを予測している。またその結果、児童の運動能力がますます減退するとともに肥満が増えていくことを危惧している。第二に、サービス部門を中心とした職業人は労働時間が不規則になったり延長したりする傾向にあるため、1 日の時間をフレキシブルに有効活用したスポーツ活動が必要となると予測している。第三に、高齢者層の増加傾向が続くために、こうした層のための健康要素の高いスポーツ提供がますます必要になることを予測している。

以上の予測の上で、4 つの目標を設定している。第一は、児童のために追加する新たなスポーツ種目の創造である。具体的には、児童にとって一風変わった目新しい運動の提供である。周辺の幼稚園や学校、医者と連携して、食事療法や減量に関連した運動をいかに提供するかといった取り組みである。第二は、青少年や年齢の若い大人にこれまでのスポーツ種目とは異なるフレキシブルなスポーツ（例えばヨガなど）を提供することである。それによって、青少年にとって魅力的なスポーツ活動の場を提供しようというものである。

第三は、大人の年齢層全体を対象に、生涯にわたって実行できるようなフレキシブルな生涯スポーツ種目を提供することである。そのために、食事療法、減量と関連した運動を医者、教会、シニアグループそして他の関連組織と連携した取り組みを提案している。第四は、少女と女性のためのフレキシブルなスポーツ種目の提供である。例えば、ダンスや自己防衛術などである。合わせて、少女と女性分野における体育指導者の育成に向けて女性の資格取得のための取り組みを活発化させることである。

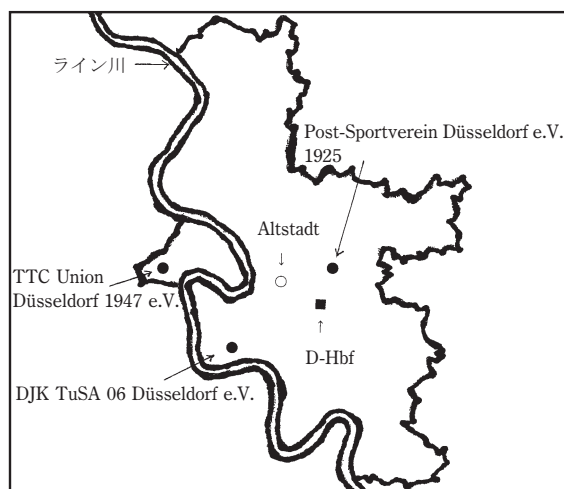
以上のように、新しい時代に対応した住民のためのスポーツ活動の質的転換とその発展を目指した取り組みが具体的に提起されている。その上で、いろんな分野との連携のもとで、スポーツクラブのさらなる発展の目標がより意欲的に推進されている。



### 3. 総合型スポーツクラブの運営の事例

ここでは、デュッセルドルフ市によるスポーツ振興策に支援されながら、個々のスポーツクラブがどのような特徴ある運営を行い、将来のさらなる活性化に向けていかなる取り組みを行っているのかをみることにする。今回は、1,000人を超える規模を有する2つのスポーツクラブと、80人という小さな規模のクラブについて、その事例を紹介する。なお、各スポーツクラブの所在地は、図4の通りである。

図4 デュッセルドルフ市



#### (1) DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V.

##### ① クラブの概要

このクラブは、デュッセルドルフ市南部の Fleher 地域にあり、デュッセルドルフ大学からは比較的近い。創立は1906年で、最初は器械体操、サッカーの種目から始まったという。当初は、カトリック教会の普及活動の一環という役割もあった。しかし、現在は純粋なスポーツ・クラブとして運営されている。

会員数は2013年現在1,350人で、デュッセルドルフ市では4番目に大きいクラブである。現在の会員の年齢別性別構成(表9)をみると、18歳までの児童・青年層が777人(58%)と過半数を占めている。この年齢層のうち、男性550人女性227人と約7割を男性が占めている。また、19~60歳層では425人のうち男性313人女性112人となっており、男性が74%と高い割合を示している。ただ、60歳超層では男女とも70人台で、ほぼ同じ会員数になっている。

次に、種目別に会員数をみると(表10)、種目としてはサッカーが620人と最も多い。男性は541人と多いが、女性も79人の会員を有している。当クラブの女子サッ

カー代表チームは、現在ドイツ3部リーグに所属しているという。次にサッカーを除くと、男性ではバスケットボール(100人)とバレーボール(74人)が多く、ハンドボール、陸上、体操も60人前後の会員を数えている。女性をみると、体操が156人と最も多い。次いで、サッカー、陸上、バレーボールが70人台を数えている。年齢別にみると、スポーツ種目のなかでも体操は健康づくりに役立つということで、60歳超の高齢者の会員数が多いという特徴があるという。

こうした状況のなかで、最近のクラブ運営では黒字と赤字を繰り返しながらも、トータルとしてほぼ収支を均衡させている。特に、2008年では収入約19万ユーロ(最近のピーク)に対して、支出は16万7千ユーロだったため、2万ユーロを超える黒字となった。会員数は2011年の1,234人まで減るもの、12年以降また回復基調に転じる(表11)。この趨勢に沿うように、収入は一進一退を繰り返す。ただ、支出面でいろいろな工夫をし節約をすることで、09年、12年には黒字を達成している。

表9 会員の年齢別性別構成

(人)			
年齢	男性	女性	合計
0~6	64	23	
7~14	368	140	
15~18	118 (小計 550)	64 (小計 227)	777
19~26	82	61	
27~40	91	18	
41~60	140 (小計 313)	33 (小計 112)	425
61~	76	72	148
合計	939	411	1,350

出所. DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V. の資料より作成

表10 スポーツ種目別性別会員数

(人)								
	バスケット	体操	サッカー	ハンドボール	陸上	自転車	卓球	バレーボール
男性	100	59	541	65	61	12	27	74
女性	4	156	79	19	77	2	1	75
計	104	215	620	84	138	14	28	149

出所. 表9と同じ

表11 会員数の動向

(人)						
	2008	2009	2010	2011	2012	2013
会員数	1,379 (100)	1,331 (97)	1,276 (93)	1,234 (89)	1,315 (95)	1,350 (98)

注. ( )内は2008年を100としたときの数値。

出所. 表9と同じ

## ② クラブ運営システム

クラブ運営に関しては、基本的に総会によって各種の決定が行われる。この総会は、会長、副会長、監査役の3人に、各スポーツ種目別責任者8人、そして各スポーツ種目で25人に付き1人の割合で選出された代議員、これらのメンバーで総会が開かれる。いわば、代議員制が採用されている。総会は毎年1~3月のなかで開かれる。

運営を支える会費については、まず基本会費として大人は年100ユーロである。ただ、学生は学生証を持参すれば、50ユーロになる。子どもは年50ユーロである。次に、割引制度もある。子どもの多い家庭や貧困家庭の子どもについては、状況に応じて割り引きが行われている。他方、スポーツ種目によっては、独自の料金が追加される。平均すれば、その負担金は大人で年約60ユーロ、子どもで約40ユーロになる。種目でみると、サッカーが一番高く、体操が一番安い。高くなる理由は、リーグ参加費やレフェリー代、コーチ代などの諸経費が増えるためという。

このクラブでは8種目のスポーツが行われている。その技術指導体制は、主に専門コーチあるいは資格を有するコーチをボランティアに依存している。特にボランティアについては、実際にクラブ会員の親が担うことが多い。コーチは、1年に2,400ユーロの収入まで非課税となっている。本業を持ちながらコーチとして働いている人は、この恩恵を受けている。指導者のスポーツ種目別構成は、表12の通りである。

表12 指導者のスポーツ種目別構成

種目	代表チーム	青年チーム
サッカー、ハンドボール、バレーボール、卓球、陸上、自転車	専門コーチ	ボランティア・コーチ
バスケットボール	リーグ別に3チーム(プロ・コーチ)	
体操	専門コーチが20人	

出所: 表9と同じ

各種補助金・支援金については、いくつかのケースがある。まず第一は、市からの補助金である。まず子ども1人についての補助金があり、当クラブでは年間11,000ユーロの補助金をもらっている。また、施設関係では、年に16,000ユーロの補助を受けている。こうした恩恵を受けるものの、最近では光熱費を中心に諸経費の高騰がありそれがクラブ財政の赤字要因になっている。

第二は、州からの支援である。州は2年毎にコーチ資格の研修・認定施設を決めている。この研修・認定に関しては、1週間の日程が組まれる。当クラブはこの研修・認定施設として指定されている。研修期間中の諸経費は当クラブ持ちだが、州の方からは別途2,400ユーロの補助金が支払われる。同時に、ここで資格を得たコーチにつ

いては、1年間はこのクラブでコーチとして働いてもらうことにしている。

第三は、企業からの支援である。このクラブでは、特にスポンサー企業はない。ただ、1年に100～200ユーロを寄付してくれる企業が、約20社程度ある。またこの寄付は、税額控除の対象にもなっている。こうした寄付をしてくれる企業は、知り合いやクラブ会員関係者などが多い。快く協力してもらっている。

### ③ 最近の問題

最近は教育制度の改革で、かつては小学校入学時から13年度で高校を卒業していたが、今は12年度で卒業できるようになった。この1年間の短縮によって、スポーツクラブでの活動は制約されることになった。というのも、それまでは小学校の授業は午前だけで午後はなかったのに、この期間短縮によって午後にも授業が入るようになったからである。この勉強を重視する授業時間の変更が、学校から帰って午後にクラブでスポーツを楽しむ時間と機会を奪うことになった。今後、さらにこうした教育改革は進むものと予想される。

子どもを中心としたクラブ活動にどのような影響が出るかという点、一つは全体として子どものスポーツ活動時間が夕方近くに移動したことである。練習時間は約1時間程度が多い。そうすると、会員数は同じだから、これまでのクラブ活動を保障するためには結局グラウンドの数やコーチの数を増やす以外にはない。実は、これが難しい問題になっているという。コーチが同時にいろんなチームを指導することは不可能であり、効率的に各チームを見て回るにも限界がある。

もう一つの問題は、子どものスポーツ活動が午後3時から夕方に移動すると、青年チームの練習時間帯にしわ寄せを与えるという問題である。例えば、サッカーの青年チームは24あり、この多くのチームは週2回のスポーツ活動を楽しみにしている。ところが、子どもの練習時間が夕方に移動する分、多くの青年チームの練習場所や練習時間が圧迫されることになった。工夫するにも限界があり、その対応に苦慮しているという。

さらにいえば、市の体育施設の利用が意外に使い勝手が悪いということである。例えば、公立学校の体育館は夏期休業期間などでは管理上の問題などで閉鎖されている場合が多い。そのため、他の公共施設を利用することで対応している。スポーツクラブは教育改革などに対応してその運営を行っているのだから、施設管理のソフトを確立して公共スポーツ施設の利用をより円滑にできるような施策を望んでいるという。これは、全てのスポーツクラブで共通する課題となっている。

## (2) Post-Sportverein Düsseldorf e.V. 1925

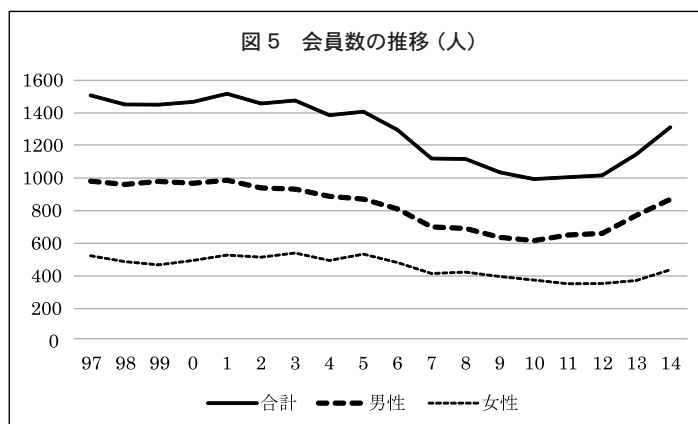
### ① クラブの概要

このクラブは1925年に創設された。その由来は、公営のデュッセルドルフ郵便局

のサッカー愛好の職場仲間が始めたことにあり、職場の労働者仲間の健康づくりのための施設として発展してきた。それ以降、郵便局の純粋なスポーツクラブとして運営されてきたが、遅くとも1970年代から郵便労働者だけでなく一般の人にもスポーツ施設として開放されるようになった。今日では一般の人が利用するスポーツクラブとなっている。

会員数（図5）は、2014年現在1,313人（男性872人、女性441人）である。1997年からの会員数の推移をみると、ピークは2001年の1,519人（男性989人、女性530人）で、その後2010年には996人（男性619人、女性377人）まで減少する。しかし、2～3年前くらいから増勢に転じ、現在に至っている。

年齢構成（表13）でみると、児童、青年層と壮年層（19～60歳）はともに558人（42.5%）と同じ数値になっている。61歳以上の高齢者層は197人（15.0%）である。ただ、一番会員数の多いのは、児童層（7～14歳層）であり、特に男性が339人と非常に多く、女性も含めると459人で全体の35.0%と高い割合を占めている。



出所．Post-Sportverein Düsseldorf e.V. 1925 の資料より作成

表13 会員の年齢別性別構成

(人)

年齢	男性	女性	合計
0～6	20	7	
7～14	339	120	
15～18	40 (小計 399)	32 (小計 159)	558
19～26	95 (小計 357)	26 (小計 201)	
27～40	104	36	558
41～60	158	139	
61～	116	81	197
合計	872	441	1,313

出所．Post-Sportverein Düsseldorf e.V.1925 の資料より作成

このクラブでは、スポーツ種目は11ある。スポーツ種目には、競技中心のスポーツと一般向けがあり、前者は射撃と柔道がそれに当たる。他は一般向けスポーツの活動となっている。スポーツ種目別の会員構成比(表14)をみると、柔道が309人と最も多く、続いてサッカー(273人)とテニス(273人)、ダンス(227人)が多くなっている。性別でみると、男性ではサッカー(269人)と柔道(210人)が多い。また、女性ではダンス(140人)、テニス(127人)そして柔道も99人と比較的多い。このクラブの射撃選手(Jessica Mager)はロンドン・オリンピックで銅メダルを獲得した。この効果もあって、射撃会員が69人と比較的多いのが特徴である。現在ドイツの3部レベルにある柔道も、過去にはドイツ大会やヨーロッパ大会で輝かしい実績を持っている。この伝統が、柔道に男女会員が多い一つの理由になっている。会員数の多い児童層でみても、柔道は男性児童135人、女性児童65人にのぼっている。このクラブでは、他のスポーツ・クラブでは多いサッカーに所属する男性児童は133人であり、柔道よりも少ない。

表14 スポーツ種目別性別構成

(人)

	バドミントン	サッカー	柔道	卓球	陸上	射撃	ダンス	テニス	体操	バレーボール
男性 (100%)	30 (3.4)	269 (30.8)	210 (24.1)	26 (3.0)	15 (1.7)	53 (6.1)	87 (10.0)	146 (16.7)	27 (3.1)	7 (0.8)
女性 (100%)	7 (1.6)	4 (0.9)	99 (22.4)	2 (0.5)	8 (1.8)	16 (3.6)	140 (31.7)	127 (28.8)	34 (7.7)	4 (0.9)
合計 (100%)	37 (2.8)	273 (20.8)	309 (23.5)	28 (2.1)	23 (1.8)	69 (5.3)	227 (17.3)	273 (20.8)	61 (4.6)	11 (0.8)

出所: 表13と同じ

注: トライアスロン(男性2人、総計2人)は表から削除してある。

特に、このクラブの射撃部(1930年創設)は最も成功している競技スポーツ活動であるという。1960年代には、Doris Mazanyがドイツ選手権のタイトルを獲得している。現在、大スターとなっている20歳代半ばのJessica Magerは、2005年にドイツの女性チャンピオン、2007、08年にはヨーロッパの女性チャンピオン、2010年には世界チャンピオンチームの一員となり、2012年のロンドン・オリンピックで銅メダルを獲得した。彼女は2016年のリオネジャネイロ・オリンピックに向けて、このクラブで週3回射撃練習をし、週3回はフィットネス・トレーニングを行っている。彼女は、報道プレスに対してもこのクラブの「条件は理屈抜きにすばらしい」と述べている。

他方、テニス部会長のPaula Kulementは、特に女性のシニアチームの女性たちが

スポーツ活動を楽しむ一方、クラブハウスでは「いっしょにコーヒーを飲み、ちょっとおしゃべりをする」と和やかな雰囲気を紹介する。そして、誰でも「ここに来ることができるし、いつも固有の遊び仲間を見つけることができる」と、このクラブの魅力を語っている。このクラブでは、地域住民の気軽な健康づくり・仲間づくりから優れた競技スポーツ活動のレベルまで、多様なスポーツ活動が展開されている。

### ② クラブ運営システム

クラブ組織としては、まず会長、副会長、監査役があり、他に11のスポーツ種目の代表者がいる。さらに、スポーツ種目で50人に付き1人を規準（50人を上回れば1人追加）に各スポーツ種目による代議員が選ばれる代議員制が採用されている。これらの構成員で総会が開かれ、クラブの運営事項が決定される。

会費は、大人で月13ユーロ、子どもで月6ユーロである。入会金、会費、コース料金などを合わせると約23万ユーロの収入があり、全収入（約31万ユーロ）の7割にのぼる。また、市の補助金については、コーチ代として年2,400ユーロが支援される。施設管理に対しては、グラウンドの年5,100ユーロ、人工芝の年3,200ユーロなどがある。青年1人について6ユーロの支援もある。これは、デュッセルドルフ市のみで他の都市ではこの補助はない。州のスポーツ協会でも、1人のコーチについて年に60ユーロの補助がある。さらに、ボールなどのスポーツ用具についても市は割引サービスをしてくれる。オリンピック種目の射撃をはじめとして、スポーツ種目への補助金は総額として約22,600ユーロとなっている。企業からの支援については、このクラブには特別のスポンサーはいない。寄付も個人的なものがほとんどで、約6,600ユーロ程度にしかすぎない。

これに対して支出は、各種スポーツ大会の開催やその競技運営、各種連盟加盟費、各種トレーナー報酬、事務所費、施設使用関連費、各種ホール賃貸料等々に及んでいる。2012年度では、支出は総額約30万ユーロで、約15,000ユーロの差額超過（黒字）だったという。年間の差額収入が35,000ユーロを超えると、企業として税金を納めなければならない。スポーツ・クラブとして運営していくためには、赤字になればもちろん問題であるが、この範囲内での活動で十分だという。

### ③ 最近の問題

教育改革が進むとともに、児童のスポーツクラブでの活動に制約が生まれつつあるという問題は、先の事例と同じである。そこで、このクラブでは、学校や他のスポーツクラブと協定を結んだりして、連携を進めたいとしている。実際に、柔道種目では、近隣の学校と協定を結び、クラブのヘッドコーチが学校に行き教えたりしている。また、住民の要望に応えるために、武道系では「空手」種目を創設すべく準備をしているという。地元新聞で紹介されているように、このクラブは、保育所の子どもから高齢者まで故郷にいるような心地よさのなかで過ごせる環境づくりと、一部スポーツ

競技のさらなる飛躍を目指した活動とを行っている。

### (3) TTC Union Düsseldorf 1947 e.V.

#### ① クラブの概要

このクラブは1947年創設され、デュッセルドルフ市でもライン川の西部に位置する地域を拠点にスポーツ活動を展開している。このスポーツクラブでは全員が卓球だけを行っている。会員数は約80人と、小さな規模のスポーツクラブである。このクラブの内容は、Torsten Budde コーチによって紹介された。彼の息子がこのクラブに所属しており、子どもの卓球競技への活動を支援するうちにクラブへの関わりが深くなり、現在のように大きな役割を担うようになったという。

クラブのチーム編成は、大人の男子チーム(1チーム6人構成)が5つ、女子チーム(1チーム4人構成)が2つ、そして青年チーム(1チーム4人構成)が2つとなっている。練習は学校の体育館を借りて行っている。その週スケジュールでは、練習日は月曜日と木曜日(4時30分~6時30分:青年, 6時30分~10時:大人の男女)で、金曜日は自由練習にしている。試合は、主に土曜日、日曜日で行われる。ただ、大人の男女に関しては、木曜日、金曜日であっても体育館使用の都合や各チーム相互間の折り合いが付くときには、リーグ戦を行っている。

ライン川の西側に位置する Heerdt 地域では、以前あったスポーツクラブのうち2つがなくなったという。その理由は、クラブの代表者が仕事の都合などで移住したりすると、クラブが維持できなくなり消滅するためだという。小規模クラブの特徴かもしれない。

#### ② クラブ運営システム

クラブ運営は、会長、副会長、監査役そしてクラブ会員によって構成される総会で決められる。財務状況でいえば、収入は会費、補助金、寄付金などに分けられる。まず会費については、入会金はゼロ、年会費として大人100ユーロ、青年72ユーロである。次に補助金については、青年には年16ユーロがデュッセルドルフ市から補助される。また、体育館などの施設面については、年に3,500ユーロの使用料補助が行われている。

寄付については、このクラブでは企業からの支援はない。80人という小さなクラブのため、ユニフォームをつくる場合には高額所得者の会員を中心とした親の寄付に依存している。中でも、10人の会員によって年間100ユーロ、計1,000ユーロの寄付が行われている。これは、用具や遠征費などに利用されるが、特には青年チームの専門的な指導のためのコーチ料として活用されている。

ポルシア・デュッセルドルフのような大きなクラブは、会員数が多いし、競技レベルも非常に高い。また、それにふさわしい能力育成策も講じられている。このクラブ



は、自前のスポーツセンターを持ち、協会や競技センターからの支援だけでなく、特定のスポンサーもついている。ただ、協会は、総じて卓球の普及のために学校への支援を行っている。いろんなクラブが各大会になると才能ある人材の発見とクラブへの勧誘を進めている。我々のような小さなクラブでも、競技スポーツを主とした運営のもと、やりがいのある充実した活動（人生生活）を過ごせているという。会員間の交流も、夏にはバーベキュー大会を、冬にはクリスマス・パーティを実施するなど、盛んに行われている。

### ③ 最近の問題

学校の教育制度改革で青年のスポーツ活動が減るのではないかと、という危惧がある。これまでは、授業はほとんど午前中で終わり、午後の時間にスポーツ活動が十分できるようになっていた。しかし、現在では午後にはトレーニングやスポーツをする時間と機会が失わつつある。クラブ活動を今後どのように盛んにさせていくのか、課題となっている。

もう一つは、施設利用の確保である。このクラブでは、市立の小学校の体育館を利用しているが、夏休み期間（約6週間）は閉鎖され使えなくなる。特に、青年チームが一番練習できる期間に施設が十分に使えないので困っているという。施設利用の円滑な活用を願っているという。

## 4. まとめ

2000年代に入って、ドイツのスポーツクラブを取り巻く環境にもいくつかの変化が起きている。一つは、教育改革による授業時間の増加である。二つ目は、人口変動（移民や少子化・高齢化）である。三つ目は、産業活動や労働環境における各種の規制緩和にともなう余暇時間、自由時間の変動である。さらに、四つ目は住民の健康面に対するケアの重視であり、その分スポーツ活動の範囲が急速に広がっていることである。住民の日常生活におけるスポーツ活動は、日常の手軽なジョギング、自転車サイクルから競技スポーツまで123もの種類に及んでいる。この日常生活の中で、幼児、児童から高齢者までスポーツを楽しむ種類はこんなに広がってきたのであり、その中で社会的な環境変化が進行しているのである。

こうした背景の下で、デュッセルドルフ市のスポーツ局は、Lessing Gymnasium NRW-Sportschule, atheletica Sportinternat, STIFTUNG Pro Sport, Stadtsportbund（市スポーツ連盟）などのスポーツ競技推進機関との連携を進めている。こうした支援策を背景として、約350にも及ぶスポーツクラブは、さまざまな方法を駆使して新たなスポーツ振興を展開しつつある。それは、スポーツ業者とのスポーツ連携であったり、住民の広範な日常的な運動をスポーツクラブと関係づける仕方の工夫であったり、

学校スポーツとの連携だったりと多様に広がっている。新しい時代状況に対応しうるスポーツ環境の整備がスポーツクラブを中心に求められており、その課題に挑戦しつつあるといえよう。

日本の場合、約20年前に総合型スポーツクラブの育成を図ってから、現在では文部科学省が指定した58の拠点クラブをはじめとして全国に約3,500のクラブが生まれたといわれる<sup>4)</sup>。しかし、経営的にみると、年間予算300万円未満のクラブが半数以上を占めていたり、サッカーくじ(toto)の助成金などに依存し自主財源比率が50%以下のクラブも半数を超えるなど、日本のクラブ運営は多くの問題を抱えている。さらに、助成金などの財政支援策は、今後どこまで期待できるのかという不安を生んでいる。というのも、totoの助成金は2014年度17億8,000万円となり2年前から半減しているだけでなく、文部科学省の総合型クラブ関連予算の削減や日本体育協会への委託事業も打ち切られたりしているからである。

2011年に成立したスポーツ基本法で国民の「スポーツ権」は確定された。ここでは、スポーツをする場を従来の学校体育から地域クラブへと拡張することによって、子どもから高齢者までの健康づくりや競技スポーツの活性化、医療費削減と地域コミュニティの再生が目指されている。地域のクラブが主体となって住民の要望するスポーツ活動をさまざまなレベルで受け止め、その輪を幾重にも広げていくことで、地域社会の活性化を促進していく。そのために、行政や企業などが支援体制を整備していく。生みの苦しみをともないつつも、その実現に向けて一つ一つ問題を克服していく。こうした中から、ヨーロッパとはまた異なる日本的な総合型地域スポーツクラブを展望する必要がある。

### 参考文献と資料

- ・「デュッセルドルフ市スポーツ局の各種パンフレット」  
“Das Sportamt”  
“Olympic Adventure Camp, Sport und Spaß auf dem Apollo-Platz”  
“CHECK! Bewegungs-, Sport-, und Talentförderung”  
“Re-CHECK!”
- ・「スポーツ都市デュッセルドルフ」  
“Sortstadt Düsseldorf-Historie, Sportveranstaltungen, Vereinsport, Sportstätten-”
- ・「デュッセルドルフのスポーツ・クラブにおける会員数とスポーツ種目」  
“Mitgliederzahlen und Sportarten in den Düsseldorfer Sportvereinen”
- ・「デュッセルドルフにおけるスポーツと運動」(「住民アンケート調査結果」)

---

4) 日本経済新聞, 2014年10月18日付け, 参照

- “Sport und Bewegung in Düsseldorf-Ergebnisse der Bevölkerungsumfrage-”
- ・「州都デュッセルドルフにおけるスポーツ振興の展開」  
“Entwicklung der Sportförderung in der Landeshauptstadt Düsseldorf”
  - ・“DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V., Konzept Zielplanung 2009”
  - ・“DJK TuSA 06 Düsseldorf e.V., TuSA aktiv, 2011. 2”
  - ・「フェライン基準規約」  
“Abgabenordnung-Mustersatzung für Vereine”
  - ・“Post-Sportverein Düsseldorf e.V.1925, Mitgliederentwicklung in Zahlen”
  - ・“Post-Sportverein Düsseldorf e.V.1925, 2012 Bruttoauswertung”
  - ・「Düsseldorf Plus 2013. 09. 12 新聞記事」

## The Sport-Promotion Program in Düsseldorf, Germany and the present Situation of “Sportvereine”

Hajime NAKANO

Düsseldorf is recognized as a major city that actively promotes sports in Germany. The objective of this paper is to discuss and clarify points about the sport and exercise promotion in Düsseldorf from several viewpoints. The “sportvereine” have historically supported sport and exercise in Germany. District “sportvereine” have been administered actively and democratically. Policies of state and local self-governing body have supported them and have worked in cooperation with them.

Recently, new situations which affect sport and exercise promotion are arising. They include extension of school hours into the afternoon, and the business of sport facilities which are operated for yoga, dance and other activities. In these new situations, the roles of “sportvereine” need to be reconfirmed and the new development of “sportvereine” will be expected in close contact with state, local self-governing body, sport societies and leagues.

Contents referred in this paper are following.

1. As a result of resident questionnaire, it is evident that many residents in Düsseldorf enjoy and play sports. The type of sports ranges over a wide field, from daily jogging, sport and exercise at “sportvereine” and at sport business facilities, to healthy exercise and other activities.

2. In Düsseldorf, recently “sportvereine” management is affected by new situations.

3. As concrete examples, three “sportvereine” are given consideration and problems which they now face, are discussed.

4. The sport bureau of Düsseldorf carries out some sport-promotion policies for the future.

5. “Sportvereine” confront issues in close contact with sport bureau, sport societies and leagues.

In conclusion, the program exemplified by Düsseldorf provides an interesting model for Japan.